

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10407

研究課題名（和文）急性期病院を中心とした地域との多職種連携に関する質的研究

研究課題名（英文）A qualitative study on interprofessional work with the community centered on an acute care hospital

研究代表者

西村 ユミ（Nishimura, Yumi）

東京都立大学・人間健康科学研究科・教授

研究者番号：00257271

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、2007年度より同一の急性期病院で行っている継続調査の一環である。2020年度からの研究では、高度急性病院の多職種と地域との連携が、地域包括ケアをいかに作り出しているのかを、病院の入口の実践に焦点を当てて、その詳細と変化を記述することを目的とした。2020年度から21年度は、看護部長、入退院支援センター責任者へのインタビューを行い、病院や看護部の方針を把握した。2022年度から23年度は、外来と病棟とが連携して取り組む実践についてフィールドワークを実施した。病院の入口の実践には、既に、患者の入院から退院後までの対応が含み込まれており、多職種の協働によって一連のケアが実現していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、看護師たちや彼らと協働する実践者たちが、はっきり自覚をしない営みも含めて、様々な要請と折り合いをつけながら、その実践をいかに成し遂げていくのか、その成り立ちと方法を記述したものである。

本研究の成果は、学術的には、地域包括ケア時代の病院で行われる協働実践のあり方を示した点に意義がある。言語化が難しい協働実践の記述を実現したことは、その探究方法にも議論されるべき独自性を有していると考えられる。社会的意義としては、地域包括ケアシステムの構築に向けた今後の取り組みの資料になるとともに、今後も続く医療の変革を、いかに推進し、調整していくのかを見通す資料にもなり得る。

研究成果の概要（英文）：This study is part of an ongoing research conducted at the same acute care hospital since 2007. Starting from 2020, the research has focused on how collaboration between multidisciplinary teams at advanced acute hospitals and the local community contributes to creating community-based integrated care. The aim is to describe the details and changes related to this practice at the hospital's entrance. From 2020 to 2021, interviews were conducted with the head nurse and the responsible person at the admission and discharge support center to understand the hospital's and nursing department's policies.

From 2022 to 2023, fieldwork was carried out to explore the practical collaboration between outpatient and inpatient services. The practice at the hospital's entrance already encompasses care from patient admission to post-discharge, achieved through collaboration among various professionals.

研究分野：看護学

キーワード：急性期病院 協働実践 現象学 エスノメソドロロジー 地域包括ケアシステム

1. 研究開始当初の背景

超高齢社会にある日本は、特に、持続可能な医療体制と、それを実現する地域包括ケアシステムの構築という差し迫った課題を持っている。同時に、今後、高齢社会を迎える他国が、同様の課題に対して対応するための資料を提供する立場にある。

団塊の世代が75歳以上となる2025年に向けて、複数の取り組みが、国主導で行われている。高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援を目的とした「地域包括ケアシステムの構築」に向けた取り組みは、福祉や医療に多大な影響を与えている。2014年には、第6次医療法改正の中で地域医療構想が提案され、急性期から回復期、慢性期まで、将来の医療ニーズの予測を踏まえて、関係者の協議によって地域に必要とされる医療共有体制の整備が進められてきた。第7次医療法改正では、地域医療連携推進法人制度が創設され、地域の病院のネットワーク化が進められている。2017年には、地域包括ケアの理念を普遍化し、高齢者のみならず、生活上の困難を抱えるすべての者が地域において自立した生活を送ることができるよう、我が事として地域を『丸ごと』支える包括的な支援体制の構築が推進された。ここで用いられた「地域共生社会」という概念は、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域が多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることを志向している。

以上の取り組みから、日本は、急性期医療と地域、制度の縦割り、受け手と支え手、専門家と非専門家、医療と介護、世代等々の区別や乖離、分化を制度によってつなぎ直し、あるいは、既存の役割や関係を組み直し、人々が住み慣れた地域で持続的に暮らしていけるあり方を、それぞれの地域の特徴に合わせて創造していくことを目指していると言える。

これらの一連の動きについては、例えば猪飼（2010）が、研究書『病院の世紀の理論』において、21世紀の健康システムの中核に「包括ケア」という概念を置き、歴史を踏まえた理論的な根拠づけをしている。本研究は、猪狩が著した「包括ケアシステムにおいては、担い手のあり方が、従来の医師を頂点とする専門家の階層システムから、多様な職種や地域住民の間のネットワークへと移行する」ことを受け、このネットワークがいかに再構築され、ここで何が行われているのかを探求するものである。

地域包括ケアシステムについては、制度を受けた組織づくりの具体的な事例が蓄積されつつある。また、在宅看護、福祉、介護の領域においては、地域での生活を支える事例報告が増えつつある。しかし、高度急性期病床をもつ病院に注目し、こうした連携を明らかにした研究はこれまでほとんど見られない。猪狩によれば、地域包括ケアの形成においては、一方で、健康を支える諸活動の場が住み慣れた地域という生活の場へと引き寄せられるが、他方で、病院はより急性期化して高度な治療を提供する場となり、この両極における2つの力によって牽引される。近年、一方の極である病院では、急性期を脱した患者ができるだけ早く次なる生活の場へ移行できるよう、Patient Flow Managementなどの方法が考案され、多職種が連携して入院する前から退院後を見越した支援を提供する動きが見られるようになった。この病院の組織的な改革において、連携として具体的にいかなる実践が行われ、それがいかに地域包括ケアに結びついているのかを、早急に探究する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、高度急性期病床を有する病院の多職種と、患者も含めた地域住民との連携が、地域包括ケアをいかに作り出しているのか、これまで研究として探求されていなかった病院を入口として、その詳細と変化を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、高度急性期病床を有する病院の多職種と、患者も含めた地域住民との連携を、病院を入口として、その広がりを追っていくことを目指していた。具体的には、中部圏にある約450床の病院をフィールドとし、段階的に入退院支援センターから訪問看護、地域包括ケアセンターへとフィールドを移動しつつ調査を行う予定であった。フィールドとした急性期病院では、2007年度から、様々な部署において病棟看護師、看護部の部長等、救命救急センター、入退院支援センター（説明外来、訪問看護部）における看護師やメディカルソーシャルワーカー等の実践、及び看護師と患者との相互行為を調査し、現象学及びエスノメソドロジーを手がかりとして分析・記述してきた。本研究はこれらの一連の調査の一環として計画された。

本研究は、2020年4月から開始の予定であったが、新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の感染拡大が起これ、フィールドワークが行える見通しが立たなかったため、同病院において継続的に実施してきた研究のデータの整理と分析、分析に基づいた学会発表と論文、図書の執筆・出版を行った。さらに、コロナ禍でのオンラインを活用した調査方法について検討した。研究代表者が所属する大学の研究倫理委員に申請し、承認を得た。倫理審査承認後、研究協力を依頼すると共に、電話及びメールにて、病院看護長、看護師長等に、病院のある地域の医療の現状について情報収集した。

2021年度には、入退院支援課を担当している病院管理職（副院長兼看護部長）、および入退院

支援課の管理者へ、急性期病院においていかに地域包括ケアを取り入れ、それによって入退院支援の仕組みがいかに改革されてきたのかを、非構造化インタビューによって聞き取った。インタビューは IC レコーダーに録音し、音声データは逐語記録に起こし、目的に即して分析した。

2022 年度は、感染症対策を行いつつ、フィールドである急性期病院にてインタビューを実施した。具体的には、調査施設看護管理者である看護部長の交代を受け、再度、研究内容について説明し、調査対象施設の看護の方針をインタビューにて聞き取った。その方針を受けて、新たな取り組みである病棟と外来の一元化、及び部署間の流動的な人員配置について、本取組を中心的に行っている病棟師長、病棟看護師、外来看護師にインタビューを行った。さらに、2023 年度調査に向けて、フィールドワークの実施可能性について検討した。急性期病院と地域との繋がりとして、病棟と外来との一元化、退院支援カンファレンスなどを推進している調査対象部署に対し、調査の相談と方法の検討を行った。フィールドワークについては、新型コロナウイルス感染症対策を行いつつ実現する方法を検討し、再度、研究代表者の所属組織の倫理審査委員会に申請し、承認を得た。

Covid-19 の影響を受けて調査が遅れたため、研究期間を延長した。延長期間である 2023 年度には、フィールドである急性期病院の整形外来及び、外来との一元化を進めている整形外科病棟でのフィールドワークを再開した。外来では、研究参加者である外来看護師の実践に同伴し、他の看護師、医師、事務職員等と共に患者に応じる実践を記録した。加えて、当該看護師へはインタビューを実施した。病棟では、看護管理者の実践に同伴し、病棟看護師や看護補助者、インフェクションコントロールチームメンバー、看護部長、他部署の看護師長等とのやり取りを観察した。当該師長には、インタビューも行った。併せて、退院カンファレンスに参加し、看護師、退院支援課長、メディカルソーシャルワーカーとの議論を録音した。

4. 研究成果

本研究期間における雑誌論文は 7 編であり、査読付き論文 2 編、招待論文 5 編であった。学会発表は、11 件であった。査読付き学会発表は 6 件、招待講演は 4 件であった。書籍は、4 編であった。

研究成果の内容は、主に、救命救急センターの実践に関する記述、看護部長の方針に関する記述、入院が決まった患者が説明を受ける説明外来の実践の記述であった。

救命救急センターの実践としては、再入院をした高齢患者が看護師のことを覚えており、また、看護師の側も患者の状態を覚えていること、さらには入院時に患者がケアに参加する実践を経験していることが、その患者が救急外来から病棟へ移動をして入院治療するという実践を達成するリソースとなっていたことを見出した。

看護部長の実践としては、2 名の方針を探究したが、Covid-19 の最中に交代した新看護部長は、看護職の異動の流動化や組織の柔軟な再編成によって、所属組織を超えて多様な場所で、いつでも誰でもチームを組んで動けることを成り立たせようとしていた。それは、急性期病院が社会の課題を引き受けて役割を担う上で求められたことであり、今後は多職種と共にこれを実現することへと向かうであろう。この方針のもとでの急性期病院は広域でネットワーク化し、急性期病院における「地域」には、近隣病院や遠方医療機関が含み込まれ、地域包括ケアのあり方へも示唆を与えるものとなる可能性があることが示唆された。

説明外来の実践としては、説明場面の冒頭で用いられる、看護師による今回の入院の目的の提示は、患者自身の来歴の語りを引き出すものであったことを見出した。説明場面においては、入院目的が患者の来歴の中に位置づけられ、患者の来歴が入退院の過程の中で参照されることで、患者の生活と今後の手術・検査が結び付けられていた。こうした看護師たちの方法によって、多様な来歴をもつ患者に対する対応が可能になり、退院後までを見越した入院過程が開始されていることが明らかとなった。

本研究では、パンデミック前に進みつつあった、地域と繋がりをもった救命救急センターでの実践を記述し、さらには、パンデミック等の状況に応じていかに病院や看護の方針がいかに形作られるのかを記述しつつ、そのもとでの説明外来における相互行為を分析してきた。コロナパンデミックを経て、部署を超えた協働実践の拡大が、組織的にも個別の実践にも認められ、この実践が、急性期病院における入口、つまり救命救急センターや説明外来の実践の中に組み込まれていることが見出された。

今後は、外来での実践や外来と病棟との連携、退院支援等にも調査の焦点を拡大し、地域包括ケアシステムの構築のゴールとしていた 2025 年度前後、そしてその後に向けた方針の変化に応じる実践を探究することを課題としたい。

文献

猪飼周平 (2010) 病院の世紀の理論、有斐閣、2010

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 西村ユミ	4. 巻 34(2)
2. 論文標題 現象学的研究におけるフィールドワークの醍醐味	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.34.2_1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 前田泰樹・西村ユミ	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 外来看護師による入院説明のワークの研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.34.1_67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 西村 ユミ・前田 泰樹	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 救命救急センターにおける再入院高齢患者への看護実践の成り立ち	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 70～80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.33.2_70	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 西村ユミ	4. 巻 36(3)
2. 論文標題 「意味」としてのストレスの現象学的探究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ストレス科学	6. 最初と最後の頁 129-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村ユミ	4. 巻 42 (12)
2. 論文標題 現象学的アプローチ 言葉にならないものと言葉にする	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Progress in Medicine	6. 最初と最後の頁 45-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田泰樹	4. 巻 4
2. 論文標題 協働実践における知覚と行為：救命救急センター病棟のワークの研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現象学と社会科学	6. 最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 西村ユミ・前田泰樹
2. 発表標題 看護部長となる「私」の経験と管理の方針の語り：地域包括ケア時代の急性期病院のフィールドワークより (1)
3. 学会等名 第49回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前田泰樹・西村ユミ
2. 発表標題 外来での入院説明における確認広告の質問のデザイン：地域包括ケア時代の急性期病院のフィールドワークより (2)
3. 学会等名 第49回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西村ユミ・前田泰樹
2. 発表標題 看護部長の方針はいかに作られるのか 地域包括ケア時代の急性期病院のフィールドワークより(1)
3. 学会等名 第48回保健医療社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 前田泰樹・西村ユミ
2. 発表標題 入院のための説明はどのように開始されるか 地域包括ケア時代の急性期病院のフィールドワークより(2)
3. 学会等名 第48回保健医療社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 前田泰樹
2. 発表標題 『急性期病院のエスノグラフィー』とその文脈
3. 学会等名 EMCA 研究会 2021 年度秋の研究大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村ユミ
2. 発表標題 身体 を介した交流としてのケア
3. 学会等名 第44回日本精神病理学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村ユミ
2. 発表標題 「意味」としてのストレスの現象学的探究
3. 学会等名 第37回日本ストレス学会学術総会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村ユミ・前田泰樹
2. 発表標題 急性期病院における入退院支援についてのワークの研究（1） 看護師と中心とする多職種の協働実践に注目して
3. 学会等名 第45回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 前田泰樹・西村ユミ
2. 発表標題 急性期病院における入退院支援についてのワークの研究（2） 説明外来におけるリスクを可視化する実践に注目して
3. 学会等名 第45回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 前田泰樹
2. 発表標題 現象学とエスノメソドロジーの現在
3. 学会等名 現象学・社会科学会現象学第37回大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西村ユミ
2. 発表標題 フィールドワークにおける間身体性：看護実践を探求する方法
3. 学会等名 共創学会第4回年次大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 榊原哲也・本郷均編、西村ユミ他著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 260
3. 書名 現代に生きる現象学：意味・身体・ケア	

1. 著者名 小宮友根・黒嶋智美編 前田泰樹他著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 実践の論理を描く 相互行為のなかの知識・身体・こころ	

1. 著者名 前田 泰樹、西村 ユミ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 196
3. 書名 急性期病院のエスノグラフィー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	前田 泰樹 (Maeda Hiroki) (00338740)	立教大学・社会学部・教授 (32686)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関